

## インドネシアの歌(1)

民謡・花編

### インドネシア民謡は 花より団子

まず最初に、筆者は「群盲象を撫ず」の群盲の一人であることを宣言しておきます。

インドネシアの歌ばかりを歌うラグラグ会という「同好会」がジャカルタに本部をおき、その支部が東京、大阪、福岡、岡山(自称)にある。ジャカルタの毎週は例外として、日本支部では毎月1回、時間に都合のつくメンバーが集まっては、インドネシアの「なつメロ」や民謡を歌っている。ラグラグ会大阪支部では、玉石混淆ではあるが150曲ものインドネシアの歌を集めて、1冊の歌集に仕上げている。と、ここまではラグラグ会の宣伝!



さて、インドネシアの歌にはどんな花がたくさん歌われているのだろうか? そう、あなたの推測どおり、1番

はジャスミン(melati=写真)だった。そして、バラ(mawar)が2番目。さらに“周回遅れ”でチュンパカ(カンボジア)、フランボヤン、ラン、ヒマワリといったところである。このほか、花を美や癒しの象徴として歌っているものや、赤い花とか青い花とかと歌っている曲もそこそこ。ところが、名前の出る花は案外少ない。これには少々驚いた。

もっとも、現地の人にとっては「日本人はうるさい。いちいち花の名前を聞いてくるが、花の名前なんかどうでもいいじゃないか。ブンガ・プティ、ブンガ・クニン、ブンガ・メラーで十分」。こんな言い方が普通なのだ。

バラの花が恋歌に歌われるのは世界共通である。が、インドネシアで国花とされるジャスミンの歌われている民謡が、見つからないのだ。ジャスミンはラユアン・ブラウ・クラパを始めブンガ・サクラなどのナショナルソングや叙情歌にはたくさん出て来るが、所謂インドネ



シア民謡には見当たらない。民謡の中でかろうじて1つ花が出て来た。アチェ民謡の「チュンパカの花(Bungon Jeumpa)に、文字通りチュンパカの花がきれいに咲いていると歌われている。

ジャスミンは種類が多く、1年中どの種類かが咲いているそうだ。ジャスミンといえばその芳香。「香りを想えば、ジャスミンを想え」と言われているほどで、真っ暗闇の中でもその存在がわかるので、夜行性人種には印象深いものになるはず。

日本でもジャスミンの一種は「春を迎える花」と言われるとか。香港を舞台にした古い映画「慕情」で April Rose というのが出て来るが、これは早咲きのジャスミンのことではないかと思っている。

ところで、前々からちょっと気になっていたのが、インドネシア民謡には、果物を含め食べ物が実によく出てくるなということ。そこで、改めて調べてみた。やはり、出るわ、出るわ。インドネシア民謡の9曲で食べ物を発見した。スイカ、マンゴ、バナナ、サゴ、椰子の実、ガドガド、揚げ豆腐、クルブック、サンタン。食べられるかどうかは別として、太陽を蒸し、星を揚げるという歌詞まである。

小さいころ、お袋が言うには「色気と食い気とどちらを選ぶかとの問いに、恥ずかしながら食い気が先」と言っていたのを思い出す。と、意味のない比較をしたところ



で、副表題の「インドネシア民謡は花より団子」となった次第である。

最後に、筆者はインドネシア国(共通)語は解しますが、バタック・ジャワ・バリその他のバハサ・ダエラーは解しないので、インドネシア民謡の全体にわたっての考察ではないことをお断りしておきます。それが群盲であるとの所以です。

インドネシアの歌を歌ってみたい方、気軽にラグラグ会に声を掛けてみてください。

(渡辺重視)